

# ‘69 キャンペーン合宿総括

全日本学生写真連盟



69 キャンペーン合宿が、68 キャンペーン合宿と明らかに相違する点は、集団撮影行動が全国的に展開し、その写真群を集積した初めての合宿である。“日本全土に向かう撮影行動の展開”が提起されて以来、その全国的展開の中で多くの撮影行動が提起され、実行に移されて行った。それらがより実体を把みとり、より現実投射されることを目指し、今回の合宿が設定された。

北は－北海道101－から南は－沖縄－サイパン島－まで、日本列島を縦断する我々の行動が－そのあるものは出版へ、そしてあるものは新たな展開へと－今、露呈さすべき問題に向かい、1つ1つ個別的かつ具体的に我々の前にたたきつけ、真実我々が今何をなすべきかを語りかけている。それは単に、日本を覆う地域的な問題にとどまらず、数千年の間、日本につちかわれ育て上げられて来たものを崩壊させ、我々の存在の根源に突き射して来る。今ここに参加する1人1人は、熾烈な闘いをくり広げ、一步一步我々に突きつけられた問題を押し進めなければならない。



# 目 次

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| ○ 北海道 1 0 1 .....           | 1  |
| < 現 場 で > .....             | 3  |
| ○ 足尾 = テーマ = .....          | 5  |
| = 残酷物語を抜けきるためには = .....     | 6  |
| 「レポート(1)」「レポート(2)」 .....    | 8  |
| ○ 東北 = 思いから実態へ = .....      | 9  |
| 「レポート(3)」「レポート(4)」 .....    | 10 |
| ○ 明治百年 .....                | 11 |
| ○ 郡上 = 無数の<郡上>を想起せよ = ..... | 13 |
| 「レポート(5)」「レポート(6)」 .....    | 15 |
| ○ 沖縄の写真群をめぐって .....         | 16 |
| ○ キャンペーン合宿での雑感              |    |
| 「レポート(7)」～「レポート(13)」 .....  | 19 |
| ○ 広島デー .....                | 24 |
| ○ 提 起 .....                 | 26 |
| ○ 編集後記 .....                | 27 |



## ≡≡≡≡≡ 北海道 1 0 1 ≡≡≡≡≡

1. 北海道 — この地に流れる歴史。それは、今に至る迄の100年余りの歲月の中で、人間が自らの手によって造り、噴出させていったものである。明治維新、開道以来、この北の国は、「日本」の中で、最も、激しく改造が推しすすめられていった。自身を近代へと変質させてゆくために、内地で教興する諸矛盾を一挙に解消する“場”としてあらしめていった。

「今日の如く重罪犯人の多くして、いたずらに国庫支出のかんごく費、増加の際なれば囚徒をして、これら必要な仕事に服役せしめ、もし、これに耐えずして死して、その人員を減少するは、かんごく費支出の困難を告ぐる今日において、万、やむをえざる政略なり。」と大号令のもとに、囚人たちを、強制労働へかりたてるために、北海道へと送りこんだ。

そして今、この「北海道」の中につやけた感じのする、白っぽく目に映る札幌の街、その中にいる、チャラチャラと浮わついた感じのする人間たち。ただ、ただ、たくましく、強く、毎日を生きるしか、立つことのできない漁民たちの生。歴史の中でほんろうされ、挫折を繰り返してきた函館。そして、そこの男たちは、マイ・ホーム的に、外からの動きに対して、極めて慎重に、上目づかいに、日々をすごす。また、自分が生きてゆくための「体験」も、物理的に食らふ術もはぎとられ、稚内へおりたった、樺太引揚者たち。彼らが造り出した哀しい街。

この様に、“人間”に対して、遠慮会釈もなしに、荒削りにザクンと、あたかも製鉄所で鉄鋼を造り出す様に「北海道」を造りあげてきたのである。この様な「北海道」の中に、今の北海道にいる人間は生きているのである。鉄道線路の枕木の数ほどの人柱によって、人間達が自身の手で、この世の中に顕現せしめたものなのだ。

2. そして、'69〜70へ向って「北海道」は目を見はるばかりの変貌がとげられている。街には、東京と直結して、フアツションなどの情報がなだれ込んでくる。原野は、白い柵でもって夢の様な世界をかもし出す。今は、明治期とはちがった局面をもって、中央からの直撃を食っている。こんな「日本国北海道」を保つ我々自身は、「北海道」にいる人間の心を感じるのだ。サーカスに見あき、疲れると、ゆり起こしても、サーカス小屋の土間の泥の上になてしまう子供たち。いつも親について畠へ行きながら親の後を追っても構ってもらえず遊び疲れ泣きつかれて、畠の上で泥に頬や額をつけて、寝いってしまう日常が習性となってしまうのだ。



そんな子供たちの心の中を吹き抜けてゆくもの。自分の生を風化させるとめどもない微風を感じざるをえない。目の前に、土の上に寝入ってしまっている子供の心の中に巢食う「痛苦」でもあるのだ。

そして又、そんな人々がうごめく街々。その街を洪水の様にあらっていった、今に至る迄の重々しい歴史の中で発生してくる「痛苦」でもあった。

このとき、我々は、この様にある現実を前にして「これではならぬ！」と叫びをあげる。しかし、その叫びは、無限の総体へ向って「否」を発しているといえる。その「否」は空間の中をつきぬけ、自分自身の中へと、ある円環をしてゆくものになってしまう。目の前にある人間の心の中に流れてゆくものに向っての叫びだからだ。しかし、人間の痛苦を感じ、それをはらむ総体を見た我々が、自身の思考の中に確かに残していったものは何か。

我々が「北海道」に向かおうとして感じたそれは、北海道の人々の心の中に脈々と流れるものであり、人間が日々の生活の中で背負わされている「痛苦」だ。その痛苦を感じる自分。痛苦としてしか感じられない自分。人間との確かな触れあい。このとき、それは、目の前にいる人と一緒になって「感じ」ざるをえないものであった。

この時、我々にとって「これではならぬ！」という「否」を繰り返すことはどのような意味を持つであろうか。

あの沖縄の人間たちが、自分たちの生を解放されようと、国家と国家のはざままで「祖国、日本へ。」とぎりぎりのところで、日々の生活の中での「体験」をたてにとって、ふるい立とうとする。そして、日本の革新陣営も「沖縄を返せ！」と叫ぶ。しかし、今、この様に発された「否」は、逆手にとられ、そのエネルギーは正負を交換され、蓄積を加えて「権力」を、等比級数的に肥え太らせることになるのだ。こんな風にある今の世の仕組みの中で、我々が「北海道」で肉体化しえたことを、永久不発の「否」におわらせてはならない。破壊力を持つ「否」として、現実の中に投げだすことによるのみ意味がある行為であり、それを指すものとしての我々の行為（北海道101）はあるのだ。

100余年にわたる内国植民地「北海道」の中で、強くたくましくしか生きられない人間たちの心を、ぼくたちは、はっきりと体内に流れ込ませたのだ。だから「原点だ！」と叫べるものなのだ。確かに、人間の思考の中に、一鍬を打ちこんだのだから。



## 《現場で》

日本のあらゆる場で、あらゆる形で、その土地の中で作られた一個の人間の思い、痛苦は無数の発想と思考錯誤をくりかえし、あらゆる場で、その実践の結末をさらけだし、幾時代の中で人間が生き死んだであろうか。

人間が時間の中で作り上げた思いを断片的にだけとらえられる中で、その黒く重たい重綜された音響にみじろぐ。

個の具体的な関係の中で、いたみを感じ、それを肉化したとしても、それへの対応を怒り、うらみ又やさしく悲しさ等々でやっていく時、又我々の許容できる範囲でそれに向かいえても、その無限に広がるいきどころのない意識は、人間全体の存在にかかわる問題とはなりえない。それは黒く重い重綜された人間の思いの深さの中に、自己の分断され、破壊されている、意識をもった姿だけがうかび上がってくる。すべてに対し、絶望すると叫ぶ、やりきれない自分にウラミを向け、ドロ沼の中へと送りこむ、行動化されない倦怠はやがて日常の一部とかわりはてる。ユートピアを求め、現実は汚ないものだと言い、学生が何をやっても、変わらないとうそぶく。

これこそ日本のあらゆる場でくりかえされた、死滅の思想でしかないのだ。

その中で何かをやるとは、一体何をどのように見て、何に向けて行けばよいのか？

我々の回りで、あらゆる場で、おこなわれている人間の生態、たとえば暴動、暴動と続く足尾銅山の100数年の中で人間が人間としてギリギリの所で闘うことを決意した反逆の時間が、あらゆる策動と個の思い痛苦（天皇は神だと思ふことから、暴力はいけないと思ふことの全て）の中でモロクもくずれさった。

そして今足尾には、やさしく、ものあたりがよい人がすんでいる。しかも一枚のペールをはがす事は、そこにいる人間の生態を権力の有り方までもさらけだす。

高校は、むこうから、不良高校のレッテルをはられ、学生はオートバイでぶつとばし、又日の当る縁台に茶を用意し、よってくるハエを一匹一匹殺しながら、通りがかりの話しをしてくれる人をまつバアさんが居り。

ここはユートピアですよといいきる鉋毒で死をまつ親父の中に足尾はタンタンと、何もなにかの様におくられている。



こんな状況は、日本中いたる所に、北海道に東北に東京に広島に沖縄に場をかえ形をかえてある。

このやり切れない様な人間が時間の中に作りだした思いを根底から、その根こそぎくつがえす事は可能であろうか？ 我々の行為をもっていくとすれば、そこにしかない。

有る事、有ると認める地点から現実の場での向う位置の決定する事からそれはある。そして、100余年にわたって作り上げられた人間の意識、思いをくみあげる事を、その時間の中で、敵対しつつけた人間の意識に対し我々は、自己の闘う場を、世の中に、諸々の関係を破壊する所でもたなくてはならない。

足尾なら足尾の歴史の全てを今有る人間の全ての行為の中でくみあげる中で人間のエネルギーをとっかえ、ひっかえねじくれさせてきた人間の意識＝権力のベクトルを向けぬばならない。その時我々は、そこに有る人間と同じ基盤で自己を含め、全てを対称とする中で、その場で何かをうちたてるであろうし、人間を根底からかえうる事になりうる。

我々が存在する人間を根底から時間が作り上げた人間の全ての痛み、思いを否認しようとする行為は、'69～'70年代へのますますねじれ、くっせつする思いの状況の中で冷く静かに大地に根をおろすであろう。

我々がどのように生き、どの様に闘うかは、全て我々自身の決定実践よりほかはない。写真と対峙する我々にとって、闘うことは守ることではなく、攻ゲキで拒絶される為の攻ゲキとしてこの世に我々の行為のキセキをなげだされるべきではないか。

みせつけること、この世の人間に自己の実体をありのままにみせつけることこそ、必要となってくるだろう。

世の中に我々の行為をうちこむ作業は→ 写真集を出すこととすれば、まず金あつめから始まる。

子供の仕事は許されなくなった。



## 足 尾      =    テ    —    マ    =

居場所のない老婆が無心に枝を刈る。道端に老人がしゃがみこみ、フーと通りに目をやる。墓場で少年がギターをひく。労働者といわず先生といわず泥酔し、忘我しようとする。高校生が日光、桐生へとバイクをとばす。人がやり切れない思いをこのように発散させていく。経済的に物質的に豊かな中で、人々の夢はカラーTV、ステレオ、熱帯魚、車と文化生活を追うことにのみある。しかし、若い人は足尾にとどまろうとはしないし、老人は「東京はいいでしょうね。」などと夢をたぐす。業務上疾病で不治の病とされる珪肺病の人は、自分の病気を運命的なものと自らあきらめていってしまう。そしてあまり豊かで平和だから人々は「足尾はユートピアだ」と幻想を持つに至る。

明治中頃の流毒事件に対する農民の蜂起、数回にわたる労働者の暴動事件などの真の人間の側からの立ち上がりに対し、軍隊の派遣戒厳令、多数の検挙などと直接的な力での人に対する圧殺。相撲大会、盆踊り大会と人の心をすりかえてしまうような露骨な人間に対する抑圧の歴史をひっかぶったところで、今の足尾はこのようにある。

そんな足尾のことは、第一次 第二次の写真でよくわかってきた。しかし、このいろいろあることの一つ一つはよくわかってきても、それがバラバラで横のつながりを持って、互いに呼びあって解ってこなかった。即ち、我々が足尾で切りとってきたことは、一つ一つの場面、即時的な大場面であり、それは部分でしかありえないのだ。確かに写真を見て私達はハッとする。そして即、人がそのようにしてはだめだと思う。しかし、私達のその想いは、長続きされず、我々の生活、足尾の人の日々の生活の中で薄れていき、打ち消されていってしまう。足尾の人達の私達の生活をゆるがせるように、これから自分はどうしたらよいのかということまでわかるように写真はなければならない。それには、具体的な足尾のどういうことの中で、彼らが生きてきた日々の生活を通して、その中で足尾の人が、今そういるということをハッキリさせていかなければならないのだ。そして、個々のことの間をどのように埋めていったら総体としての足尾が、町、農家などを撮ることであるだろう。

しかし、単に総体にむかうといっても、足尾はそれ自体の個別な歴史の上に、今ある個別なことの中であるのであり、それをハッキリとふまえない限り、足尾の総体に向うことはできないで



あろう。

そして総体に向い得た時に我々の行為、写真は人の心の中に根深く切りこんでいく力となりえるだろう。

\*\*\*\*\*

## 残酷物語を抜けきる為には

\*\*\*\*\*

まさに足尾という飼い殺しの歴史の中で、明治時代、朝鮮人または囚人が、強制労働者としてかり出されたり、人間が動物かものとしてしか存在できなかつたり、不治の病いといわれる珪肺病で無残に何の叫び声もあげずにバタバタ死んでいく、そのようなやられている人間のうずの中で、代議士であつた田中正造はその状況にたまりかね国会請願、ついには直訴におよぶ。だが、生命をかけての行為も失敗に終つた。それはまさしく水面に投げられた小石でしかなかった。そのことは、たしかに足尾の人間に波紋を起しえた。幾万人の人間が、より人間として生きる為に何度も何度もたくみにやってくる古河に向つて起き上がった。だが、波紋をおこした水面は、やがて元の静けさと化し、すもう大会、花火大会、盆おどりへと人間の思いはしだいに消されて行く。全てが物質的欲求にすりかえられ、子供にはピアノ教室から大学のことまでびっちり計画だてられている。

人間がやさしくいること、人間として生きる為の叫び声もあげずに古河の黒いモヤに包みこまれ日常を過ごす。このことは、とっかえ、ひっかえにたくみにやってくる権力にやられている人間が具体的にどうあるのかをつきつけられた。人間として生きようとする叫び声もあげずに、ただひたすら毎日毎日を眼先きのことだけで生きようとする時の恐怖と不安をいだかざるを得なかつた。まるで足尾の歴史からある墓地に一人立たされたように。

目の前に見えない何か得体の知れないものでがんじがらめに包まれたとき、一体どこに向けて叫び声をあげればいいのか、恐怖と不安、逆にカラーテレビ、熱帯魚、車の生活へ埋没してしまう。

より人間的な憤り、憎しみをもち、叫び声をあげたい。それは霧のかかったような、幻想に向つてではなく、はっきりと実体に向つて、だが、いざ叫けぼうと身構えても何をどこに向けて叫



べばいいのか。自己の中へ埋没してしまう。足尾の人間が流毒の被害でひっそり暮していく。おばあさんはひたすら草をかることに身をおく。ハエトリのおばあさんは朝から晩まで縁側で人の通るのを茶を用意して待つ。いつしか、ハエは袋一杯になる。それは、私が身の置場のない、やることだけに没投せざるを得なくなる時の行為そのものだ。日常の生活からの脱皮を求めて、だが、すぐに又元の生活に帰着する。今は日常生活の脱皮だけを求めて、かき消すことに身をゆだねたり、不治の病いといわれる珪肺病で何の治療も受けることができなかった以前に比べて、今は療養所ができ、死後の保障金もちやんと用意されていることで、昔より住みやすくなったというような、逆ユートピアの世界へと向ったり、しかし、消そうとして、もがけばもがくほど体中が、がんじがらめになり、ついには身動きできなくなる。

目の前のことが、足尾のことが、自分のことが、まるで目の中に飛びこんでくる虫のように感じる。それは痛々しくて、つらくて、どうしようもない。だが、そのことだけとらえても出口のないところで円環運動をするだけである。今はそのこととはっきり訣別しなくてはならない。

私は足尾をやっていく中で、がんじがらめになり、ついには身動きできなくなった時の人間のやりきれなさ、つらさ、を垣間見たとき、私はすでに、私のその居方を決定することを迫られた。身動きできなくなった人間のやりきれなさ、うらみ、つらみ、全てを背負って、自分の足で地面に立つことをなお一層迫られる。その時は、人間のやりきれなさ、つらさを垣間見るという。つごうのいい時には、カーテンをひく。だが、声はいつも耳につきまとう。内側のことは何一つみえてこない。

今はべつとり血に染ったカーテンを私の手でひきちぎり、私の足で踏み込んで、飼育殺しの歴史中をより具体的な中で、くつがえすことに向かおうとしている。しかし、やられている人間のことを、1つ1つ分断されたことでしかわかり得ない。1つ1つがいくら強いものであったにせよ拡散を生じるだけで総体に向かう行為には成り得ない。

私たちが思考し、決定しようとすることは、とっかえ、ひっかえやってくるたくみな権力にやられた人間達が、営々と引きづってきたそのものである。今までの歴史の中で一体何によって人間がやさしく居てしまったり、逆ユートピアを持たざるを得なかったのか。人間が人間として生きることをたくみにすりかえられた中にでも安楽の位置を見い出す時、人間の思考、行為、それは日常の中に倦怠としてチリのようにつまれている。そのうずのようになっているチリより強い



ものを持ち、今、そのことをはっきりと具体的な中で見せる上で、人間のやりきれなさ、つらさにまつわりついている根を孕みこむ中で、足尾の又、日本の総体的状況の核心へと向うべきである。

はっきりと心に留め置かなければならないことは、足尾の歴史の中に連綿とあったものは決して改めることなく人間の奥底にたい積し人間の上に幾重もの層を成していること、そして自分が向き合わねばならないのは、まさに、そのことであること。

幕府が倒れ明治政府が次の時代を開き、更に戦争が終って、新しい日本が発せようと足尾にあることは、何も変わりはしなかった。足尾に生きる人間は今も100年前も同じように身をさらされている。

そうした歴史を今転ぶくさせないかぎり、100年後の(足尾人間)も、100年前の歴史を繰り返すことになる。本質的な人間のいかたが全く改められず無数の人間が歴史のヤミに忘れられていく、(現実の、歴史の)すさまじさに何とか立ち向かおうとすることは、自分が生きる、生きていこうとすることの真の問いかけになるだろう。写真をもって、いまの自分を人間の歴史の中にしっかりと位置付けることをやらなければならないと思う。

レポート (1)

日本人に多い病気は、諦念と自閉症ではないかと思う。歴史をみてもあきらかなように権力者側は絶えずそれを利用してきた。人々を孤立化させ弱体化させて精神的に圧迫してきた。又、その際ぎりぎりの線において表層化する反体制的なエネルギーを物質的なすりかえによって消化しつづけてきた。例えば足尾においても明治の頃から続いてきて鉋毒事件、足尾暴動において爆発したエネルギーは、その後幾多の弾圧、懐柔によって内在化させられ、今では消滅しかかっている。逆に述べると鉋毒事件で田中正造と共に立ち上がり足尾暴動事件で警察隊に立ち向った足尾の人々は、今では一見ひっそりと幸せそうに暮している。しかし写真に表われた何でもないような動作の中に耐えきれないほどのやりきれなさを感じる。思うに足尾の人々は、鉋毒事件、暴動以来、精神的、肉体的弾圧及び懐柔によって反体制的なエネルギーを潜在化、しいては、消滅するようにつとめてきたのではないだろうか。状況を自



分に適合しようとせずに、自分を状況に適合しようと必死になってつとめたのではないだろうか。状況の中で孤立化することを恐れんがゆえにであろう。その際に表われるのが対人関係にあらわれるやさしさではないだろうか。そのやさしさを感じるのは、一方的なものであり、片思いの状態であろう。そしてそのやさしさの間に時おり生ずるやりきれない表情にハッと心をしめつける。足尾以外においてもそのことは感ずる。農民のがんこさにおいても、「サラリーマンの笑い」においてもこのやられっぱなしの状態において人々のもつささいな抵抗が反転したユートピアの思想ではないだろうか。我々が行動するときに於ては、これらのことを自分の中においても回りの状況においても破壊し、鋭く突き通していくべきだろう。

レポート (2)

## ＜東北＞

### ~~~~~ “ 想 い ” から 実 体 へ ~~~~~

今、東北を思うとき、東北の持つ深く閉された陰うつなイメージは我々の上にどうしようもなくやり切れないものとして重くのしかかってくる。「こんな所で生きていくには硬いからの中にもじっととじ込もって生きていくしかないんじゃないか」とも、たまに思ってしまう。東北は貧困なんだ！ こんなイメージをずっと昔から営々と引きづってきている。それは天井のシミとなり、畳のささくれとなっていまも日本の下層を積み上げていく。機動隊や自衛隊の隊員には東北の出身者が圧倒的に多いという。このことは日本における東北の在り方の一側面を如実に物語っている。ここには唯単に食えないからということより、更に重要な問題をはらんでいる。また岩手の農村の農民達は、あまり新聞をとっている者が無く、村の中でとっているのは、校長先生や先生とかいういわゆる村のインテリ達くらいなものだという。これにひきかえて北海道の開拓民は進んで自ら新しい情報に接しようとする。これらのことのもつ意味は東北の閉塞性を明らかにする。こういった重くたれこめたような風土の中で岩手の一地主の子として生まれた宮沢賢治がそれも農民を相手に生きいろいろな問題をいまだはらんでいるにせよ、行為しえたということはやっぱりすごいと思ってしまう。今回のキャンペーン合宿の中で我々は東北できりとられた写



真を見、考えるときを持った。その中でその写真で彼らは東北の底に泥の如くドロドロとして沈潜し、営々とシミついてきた状況の中で自らの存在の認識を目指している。しかしながら彼が東北のこの状況の中で自己の存在を確かめようとはするのであるが、日本のそして東北の底にドロドロとして黒くしみついて来ている状況の中で彼にのしかかってくる現実をつき崩す視点を持ち得ないままに沈潜し悶々としている。人生はやりきれなくつらくむなしくふつきれないままひきづっていく。だけど人生はむなしいなどと思っているうちにも状況は刻一刻大きく様々な人間達のウラミ、ツラミをはらんでますますドス黒くウミのように留まっていく。こういった刻一刻変貌し、凄まじさを増す状況に対し、もはや一步も引くことができない地点で様々な関係をはらみこむ中で1つ1つ積み上げていく、といった思考をより確かなものとして我々は今回の合宿において確認することができた。しかしながら班で最初東北の写真を見てゆく中でそれを撮った人の話しを聞いたりしたのであるが、同じことばを用いながらも、当初全然かみ合わず、ある人は自分は、写真で現実に関与することではなく現実の中における自己を、また自己の存在を掘り下げようとするが、彼にとって現実は大変さみしくって、つらくて、やるせない。といったことになる。我々はそこにおいて、我々と、また自分とその東北の人間の居方の間にほとんど決定的ともいえる差異を感じとった。今東北という泥の如くドロドロとして沈潜し刻み込まれてきた状況の中で我々が彼がその状況の総体に向かって様々な関係をはらんだ中で、より確かなる行為を志向するとき、我々の又自分の現在の居分の中からのみの発想だけでは語り、決定を下すことはできない。ここにおいて我々が今、日本における東北やその人間の居分を問題にしようとする時、共にその東北的土壌の中から思いを起し、その中で、その閉鎖的な状況にのめり、やりきれなさ、虚しさで、いたずらに悶々とするのではなく、福島で、岩手で、はたまた仙台において深く閉ざされた陰うつな東北の固有なイメージを貫ぬき通して、日本の総体的状況に向かって自らの基盤から一つ一つ確実に、そして具体的にパワーあるものとして起さなければならない。

白い雲の外の遠くにまるまっている青い眼の魚のいる寒い砂漠の中でふるえている彼を犯罪的に救出せよ。私はいまあたたかいストーブの中でふるえているのだ。だれも住みえない所がだれも住んでいないということは非常にものすごくたいへんにさみしくってつらくてやるせないことなんですの。 。だけど私はいきなくっちゃいけないとお母さんはいます



がお母さん私はもうすぐあなたをころして、もうすぐあなたとおなじいちにすわるでしょうが、おじひのたくさんたくさんある神さまは、アポロンの聖火に右の手をあたためながら、きつときつとぜったいにおゆるしくださいますでしょうから、きつとみんなは私のことをえいゆうだといってくれるでしょう。

レポート (3)

今回のキャンペーンに関して私自身が確認しなければならないことは、今までかかわりあってきた作業、状況とのかかわりあいにおいて、常に日常性の中に埋没してゆこうとする自分や、絶えず引きつづき起してゆく作業の強化と共に、その最大の敵である日常性べったりの生活を最大の敵意を持ってあばき出してゆかなければいけない。さらに又、我々を日常性べったりの完全なるユ着形体を示した生活を志向させ、なしくずしにすべく策動を続ける国家悪へ対する敵対関係を明確にしてゆかなければならない。ここで一つだけ心にひっかかってくることは「悪」とはいかなるもの……………。

レポート (4)

## 明治百年

国民総生産第2位。この言葉を聞いた時、我々の頭に浮かぶものは何であろうか。数年前オリンピックが開催された時、アジアで唯一の開催国として、そして今70年に万博が開かれようとしている時、それは我々にとって日本の繁栄を端的に表わしている言葉のように受け取られる。しかし繁栄という言葉によってすべてが語り尽くされる時、我々の心をよぎる疑問は一体なんなのか。オリンピックの時、これは日本が世界へのひのき舞台に立つ時なのだからといって、高速道路を作ったり、新幹線を走らせたり、あるものを「オリンピックのために……」と言う事で作り変えてしまった。このことは日本の繁栄の意味を象徴している。常に急ごしらえの繁栄、そして常にそれが国家的事業で行なわれる。今の現実ができあがるプロセスはこのようなものではなかったのか。明治初めの二大スローガン、「富国強兵」「殖産興業」はここへ向けてのものであり、そしてこの2つがその後の日本の方向を決定づけた。今の現実には明治百年間の集積の結果としてある。だからこそ今、現実を問題にすると行った時、百年間の歴史



を問題にする必要があろう。歴史の主役が常に無名の群衆である時、百年間の歴史を問題にするとは1人1人の人間の事を問題にしなくてはならない。

オリンピックの英雄、円谷選手の死は我々に何を物語っているのか。「もう走れません」という遺書を残して死んでいった男にはメキシコオリンピックの事が頭にあった。東京オリンピックの英雄としての期待が一身にふりかかり、日本の国家そのものが彼の背にのしかかっていた。1人の競技者の技を競うという所から国家の問題になってしまった時、1人の人間にとってそこから抜け出る道は何だったのか。円谷選手は死を選んだ。自己を消却してしまう事により、解決の方法を見つけた。誰かが言う「学生のやっている事(斗争)はわかる。でもいくらやっても世の中なんて変りっこないよ。」我々は国家にあやつられているのではなく、このように行為してしまったり、考えてしまったりする人間1人1人が国家を作っているのだということに気付かない。国家を総体として見てしまい、実は1人1人の人間の集まりによって成り立っているのだということに気付かない。この百年間の中で人間は実に多くの事を行なっている。生きている時代と真向うから対決した人間。自分の位置も確かめもせず、ただ自分の生活から抜け出したいためにいっしんに働いた人間。時代に対してある矛盾を感じながらもどうしようともせず、あるいはどうにかしようとする事と自分の生活を守る事の板ばさみに会って死んでいった人間等々。そのような人間がすべてこの百年を作ってきた時、実は我々の中にも百年間を作って来てしまったものが潜んでいることを確認しなくてはならない。70年及び70年代に向って、日本の資本主義がさらに変質をとげようとし、そしてその中で'67、'70、'78以降の斗争が示した人間としての行為が、人間の側からの確かな叫びが圧殺されて行こうとしている時、我々はこの百年間の中から、はっきりと現実に対して有効な手段となりうることをつかみとらねばならない。それは百年の歩みの中で確かな事としてわき起った行為(ある人間は自分の生活から、ある人間は時代と真向うから対決する中で) — そのような反逆の目をつかみとることである。



## 《郡上》

\*\*\*\*\*

### 無数の〈郡上〉を想起せよ

\*\*\*\*\*

暗闇の中にそろいの浴衣を着て一心に舞う無数の人間の群れ。その後にはフィルム会社のマークが入り、顔の部分だけをくり貫いて踊っている人間を描いた記念撮影用の看板。一見、ダイナミックで、また一見異様で薄気味悪く、ザワザワと地底からのざわめきが聞こえてくるようなその前の写真に比べて、それは語り様のない空洞感を見る者に覚えさせる。

写真群はさらに様々に転開していく。晴着を着て結婚式に参列しようとする人達。大写しで捉えた人々の顔。顔。国体で天皇が来町する際に急いであつらえた宿泊施設を転用した観光センターで働く婦人達。町を見降して急な山の斜面に整然と立ち並ぶ墓標。町の主な産業の一つである生糸を生産する製糸工場の中等々。

我々にはこれらの写真群が、山の中に佇むある町の日常を追って展開したものだと知ることができる。ぞが、これら迫真に満ちた現実の諸相は、見る者をただならぬ境地に陥れずにはおかない。ここに基地があるわけでない。機動隊がいるわけでない。ごくありふれた町の様子。しかし、これは何という重苦しさだろう。幾重にも重なって我々の上に覆いかぶさってくるこの言い知れぬ圧迫感。ともすると窒息してしまいそうな感じはいったい何だろう。

この町が郡上である。この地で、かつて変革を志した民衆による一撥が勃発したという。身動きもできぬ程がんじがらめの封建制の下で。一撥は成功したが、藩が入れ替った後、様々にはり巡らされた策謀は、その時民衆の内部を奔流した生存のほとばしりともいうべき赤い鮮血を鉛色に変えていった。その一つが郡上踊りであり、また町の要所に分散した寺院であった。寺院は万が一の時、町に攻め入る群衆を防ぐ為の砦であり、平時には民衆を懐柔する思想教育の場であったという。

歴史のひだの中に埋もれ、史実としてしか認識できぬ郡上の一撥。いや、だが我々はおびただしい時間の流れの内部に営々と受継がれてきた郡上踊りの中に、鋭ぎすまされた現実の一形態を見る。それは人間の存在の今でも脱し得ない何かなのだが。事実、夏の2カ月間郡上の町は、それまでのしじまを破ってすさまじい喧騒に明けくれる。その季節には踊りを見ようと各地から集まる人々と、働き先の都会から戻った町の人々で郡上の町は数倍にふくれ上り、夜を徹して踊り



明かす。そして、その華かな場の中に現在を生きる人間が内に孕む“現実の痛苦”がかき消されていってしまう事実。祭りが終ると、町も、帰省していた者も、他から来た者も、何の変哲もなかった様に、以前の自分の日常に励みだすという事実。それは、それだけで我々を震撼させるに十分である。

写真群が持つ圧迫感は、こうして郡上踊りが過去において、そして現在においても持つ意味と現在の郡上の町の転倒した有様とその三者が意味連関を持って一体となった時、巨大で残忍な現実の一断面として我々に迫り、意識を研澄まし、我々の身を捕えて離すまいとする。この現実を我々はどう受取めればよいのか。「こういうように人がいることはいやだ。」とか「見ていると耐えられなくなる」といった認識しまいと否定するのではなく、強い拒否を。真に人間的な存在を目差し、それらを変革すべく自らを状況の中で対峙させる姿勢こそ、我々が為すべき唯一であろう。後戻りをせずに。そして〈郡上〉を単に日本の中部山岳地帯にある一つの町として見るのではなく、自らの家の中における、旅行の行く先々における、北海道の炭鉱地帯における、万国博建築の鎚音における、言葉の中だけでやがて返還される沖縄における、我々の目の前の無数のおびただしい〈郡上〉を想起しようではないか。

ここまで郡上を対象化し、写真という形に外在化してきた行為は、まさにこの撮影活動に参加した一人一人の生き方が賭かっていた。生き方といっても、我々はそこに自己の生活に窺々とするのではなく、自分の問題を今生きる人間の問題とし、人間の問題を自分の問題としていく解決に向う個の姿を見る。優雅さとか知的さなど一切いらない。がさつで稚拙であろうとも精一杯生きているのだという、郡上一撥が成功したあの時に人々が浮かべたであろう表情を今生きる人間がすべて分かち合えることを目指して。我々は、この写真群を以上のように決定し、今までの自己のあり方から脱却せねばならない。今、一つの時代が終り、別の新たな時代が始まろうとしている。我々はそこにただならぬ気配を感知することができる。今後、人間の生存に対する外部からの規定はより微細に渡り、その質、量ともに圧倒的なものとなるだろう。そういう状況の中で、我々は一人一人個の次元から全人間的な次元へと個の課題を止揚していく活動を外在化していかなければならない。今ここで我々は、そういう活動の場に自分のサークルを据える決意をしなければならぬ。



「郡上」を写真集にすることは、私自身のこれからの行為の基点としてある。

しかし具体的に何をするのかということは見い出せない状態。

サークルを出て、'70に向かって益々集団を組む必要性を感じる時どうすればいいのか。私の問題として、私がどの様に集団の意味を問うても集団の必要性を感じても、具体的な行為として考える時、私自身がどのように、集団の中への位置の仕方をすればいいのか、ということは理論上は分かっているけれども体で感じるものとしては、はっきりしない。

激化するこの状況の中で、私自身、郡上、四日市で何かに向かおうとする。しかしそれが私自身を決定的に変えるべきものとして、思考はまわらず、ある行動のわくみみたいなものを感じる。この様な中で私は私自身への直接に変革をもなし得るわく内思考から抜け出た行為をしていかねばならない。

レポート (5)

私の今までのあり方が、合宿にでてなんども問題としなければならないことは分かり得ても、それがそのプロセスの段階に於て、何かが浅かったことを感じ、そしてそれが私自身が変わらない根本原因であると思ってきた。現実の対応の中で真にプロセスを経ない限り問題が出ないことは分かりきったことであろうが、私自身の生身でふれあう部分の意識化そして、それでもって写真をとる行為が少なかったことを、私が「郡上」をやる中で痛感させられることである。

その具体的プロセスを埋める作業は、私自身が問題とせねばならないこと、つまり現実の中での私がどのような位置にいて、何を行為するかという問題と同じことである。

私自身がたとえば女であることに対する親との関係のあり方等打壊することは、歴史の中の基盤が「家」にあること、そして個々の現実にある家の在り方が歴史の中の諸々のからみあいの中の現実にあるという認識の上に立って——私の行為の次元、つまり集団撮影行動を行なっていく中で、それだけでなく、私が生きる上に於ける行為の全ての中でしかなしえない。歴史の中での人間のあり方をとらえる中で管理社会的な問題を貫き通さねばならぬことは、郡上の人達があの様に生きること、生きねばならないことの中から、直接国家の問題にふれてなくとも、そのことをも考えねばならない同次元のものとして存在すると思う。

「足尾」の個別のこの問題はあるけれども、そういうあり方、例えばお墓、高校生がオ



ートバイでとばすこと、「この町はユートピアである」と町の人達が言うこと等は  
足尾の問題個別のこととしてはないであろう。

レポート (6)

## 〰〰〰〰〰 沖縄の写真群をめぐって 〰〰〰〰〰

そして今“沖縄”が我々につきつける事は、沖縄の写真群全体を通してまず沖縄に行った人がよく撮る写真だと言われた。それはどういうことなのだろうか。作者は沖縄をどう見て、沖縄へ何をやりに行ったのか。ここで問題となったのは、特殊“沖縄”という見方である。確かに、昭和26年、対日平和条約第三条(沖縄諸島に関して、「合衆国を唯一の施政権者とする信託統治制度のもとにおくとする」「合衆国は、領水を含むこれらの諸島および住民に対して、行政、立法および司法上の権力の全部または一部を行政する権利を有するものとする」)締結以来、あの小さな島に本土と同数に近い120余りの米軍基地が置かれた。戦前第一次産業の生産額が全産業の25パーセントであったのが、現在2パーセントにすぎないというひどい土地取りあげと強制収容、更に、放射能汚染の為魚が売れなくなり、糧を奪われた漁夫は、軍作業につくしかなく、大半はいまもなお失業中である。土地を奪われ、糧を奪われた人間が基地に依存していかなければなくなるのは当然だ。そして、それゆえにうみ出される凄惨な状況。更にB52墜落、核の恐怖、その中で日々の生活を営んでいるのだ。そして、沖縄は、中国封じ込めの為、ベトナムへB52が飛び立つ為、アメリカのアジア戦略の要め石だ。「突然、ものすごい爆音と共に頭上を黒い影が横切った時、言いようのないものを感じそれから写真を撮り出した」と言う時、確かに本土をはるか離れた小さな島は、このままには許されない特殊“沖縄”である。しかし、何如、現にある事のすごさに比べて写真は見る側をゆるがさないのか。総理府発行の身分証明書とドルを携えて“日本”に降り立つ者に一体、何が待っているのか。その者の血と肉と、沖縄の血と肉とは。

古い村落共同体から族長支配になり、覇権争いで沖縄を統一した尚氏は、貿易と文化による立国を計画し、中央覇権と禁武政策を実施、「琉球の黄金時代」と呼ばれる平和と繁栄をつくった。それまで友好的な交わりをしていた隣国薩摩は、沖縄が禁武、守礼の国で無防備であることを見



きわめると、急に威圧的態度をみせ、慶長14年(1609)薩摩が殺戮と放火による一方的な戦争で沖縄を侵略、琉球王以下、高官を捕虜とし、本州を引きまわしの上、「永久に二心なし」と誓わせた。島津が沖縄を侵略した真の目的は秀吉の朝鮮侵略以来、禁じられていた中国貿易を琉球を通しておこない、その利益を独占する為であった。したがって中国から冊封使が沖縄に滞在している間は、沖縄が島津の属国である事が分からないように、日本語の禁示、日本通貨の使用禁示は言うにおよばず、生活の隅々まで日本色を一掃させた。一方島津は琉使節の江戸上りの際は、中国服を着せ、食事、作法まで規制して、異民族を従えている自らの権勢を誇示したのだった。沖縄を占領した島津は、全島をくまなく検地して、年貢米は沖縄の米作高の四割にもなる事があったという。飢饉の時も容赦はなく、上納の後、薩摩から高価な米を買入れて、飢餓をしのいだこともあった。年貢米の他に、更に芭蕉布、上布 *etc* の貢布があり、人頭税をはじめとして、苛酷極まる貢納制が課せられていた。住民の上に島役人が、その上に琉球王が、更に島津が、その又上に徳川がという、四重五重に差別と収奪の網が張りめぐらされていた。

「島津への貢納、労役の負担は離島の離島へとしわよせられていた。人頭税を納めるためにもうけられた与那国島の人減らし制度は重税の苛酷さを如実にものがたっている。島の断崖絶壁にクブラバリと呼ばれる岩の裂け目があった。臨月の妊婦は必らずここを飛ばされる。落ちればもちろん死ぬ。無事飛越えた妊婦だけが子供を生むことを許された。また島の中央にトングタと呼ばれる水田があった。ある日突然法螺貝や銅鑼が鳴る。すると人々は死にもの狂いでここに駆けつける。水田は狭く全員入れない。遅れてきてトングタからはみ出したものは、その場で斬り殺された。みごもった女が、一体自らの日々の生活をどのような思いで暮らしていったのか。又今迄一緒に生きていた村の仲間を、或は肉親を殺さなければならないところまで追いこまれた人間が、その事実を自己の人生の中でどのように受けとめて生きていったのか。悲惨というには、あまりにも極限的な状況において自己の生を自らの手によってつくり上げていく事など、全く根こそぎ碎かれていった。このような状況の中にあって、もはや一個の人間が生きていく為には自己の内部において悲惨と自覚する事さえ出来ないまでになっていったのではないか。明治政府になった時も、沖縄県として日本の行政組織の中に組み入れられるや、その政策は一見民主的ではあったがその実、島津とは何らかわらない差別と収奪が貫かれた。県の人事は知事以下役人、教員、巡查に至るまでほとんど他府県人であり、参議院議員選挙法の施行は他府県よりおくれること22



年、地租改正は30年もおくらせて施行された。しかも、新らたな国税、県税、市町村税等の負担は他府県に比べてはるかに重かったのである。新政府が作ったものは権力による収奪機関だけであり、これをみても、沖縄というものが本土にとってどのような対象であったか明らかである。明治以後、昭和になっても、沖縄県人は要職につけず、本土に来た沖縄人が、ただ沖縄人であるというだけの為に職につけないという差別をうけ続けているのである。そして、第二次世界大戦の沖縄戦において人口45万の $\frac{1}{3}$ が戦死するという凄惨をきわめた。しかも、男女、学童、老人を問わず、特攻隊として斬り込み、又は、自決をとげたのだった。360年間もの差別の歴史の上に立った。沖縄人であるがゆえの、あまりにもひどい犠牲である。そして、政府のその沖縄に対してとった態度は、前述の対日平和条約第三条という、沖縄を犠牲にして、自らを助ける支配者としての裏切り行為である。このような沖縄に向かう時、いかにも特殊沖縄という自分と離れたところで沖縄をみてしまうのはまちがっている。今という状況の中でいろいろな形でやられている人間として、同じ地続きの所に立たなければならないと言われたが、しかし、それにはあまりにも、沖縄の人間は遠くにいるのではないか。同じ地盤に降りるにはあまりに。沖縄の写真群の中に町の写真屋の壁にびっしりと、百日記念と書いた赤ちゃんの写真が並んでいるところを撮ったのがあった。その写真を前にした時、我々は、事の異様さに驚いた。それはもうなかば慣習化したものであるとしても、今という時点に、このような形で現われている事実は、沖縄の、生命にそれまで執着していく歴史の中に我々を引きこみ靈感させる。

しかし、作者はその事実を前にして、ただ気になった時点で止まっている。それは入れ墨をした老婆をおさめた写真を撮る時の態度にもみられる。これらの写真を前にした時、一体作者は自らをどのような人間として位置づけ沖縄に何をしに行ったのか。と問わざるを得ない。写真を撮るという主体の存在のかかった行為において、沖縄に向かおうとする時、総理府発行の身分証明書とドルを携えている自己の存在を問わずに何を為し得る事が出来るだろうか。我々の地盤は差別者としての、支配者としての地盤だったのではないか。そこをぬきにしては、沖縄に向かう事は出来ない。ある沖縄に行った人の話では「沖縄の大人は日本（沖縄を除いて）の事があるためにをもって“本土”と呼ぶ。しかし子供達は、はっきりと“日本”と使う。僕はある子供にたずねた。『ここも“日本”だろう』『いや、ちがうよ。ここは“日本”じゃないよ』我々はこの少年の目前に立って一体何と言う事が出来るだろうか。我々はこの少年の言葉を受け止め、今



迄の自己の存在を乗り越えるには、どのような行為者として自らを位置づけるのか。今や、沖縄人の悲願「祖国復帰」革新陣営のスローガンである「沖縄返還」を逆手にとり、それを大きくのみこみ、おおいかぶさる形で、日米両政府は70年安保と絡ませて、積極的に72年返還に乗り出している。これは一体何を意味するのか。70年代の方向として、国際政治上では各国が国内問題で手一杯になり、その中で、日本が大きくクローズアップされてくるのではないかとわれ、又、国内においては、自衛隊の防衛整備計画の中で育成されてきた防衛産業は、その設備のフル回転を望んで装備拡充へと産軍複合体制形成へ向っている。そして70年代日米安保体制下、中共の核装備、ミサイル開発、38度線の緊張等に対応し日本は積極的に東南アジア進出に乗り出そうとしている。ここにおいて「返還」とは産軍複合体制下、東南アジア進出に向けて、本土と沖縄とを再編強化しようとするものに他ならない。またもや、本土は、沖縄に対して、支配者としての立場で、政治的に、経済的に組みこみ、進出の銃口としての役割をさせようとしているのだ。沖縄人の本土を祖国とする深遠なところの意識と、被差別の意識が葛藤する延々と晴らす事の出来なかった歴史を、今こそたちきり、自己の生を自らの意思で生きていく当然の権利を奪い返す時なのではないか。日々の生活の中で、歴史の中で眠らされた意識をよびさまし、政治的に、経済的に、又様々の関係の中で、のしかかってくる力を打ち倒し、闘いをくりひろげ、確実に勝ちとっていかなければならない。

---

## '69 キャンペーン合宿での雑感

---

このキャンペーンにおいて私自身が一番心にとめたことは、写真を見、それを言葉で語る時の難しさである。こんな感じとか、心の中で決定されていても、それを言葉で語る時のあいまいさが、いやというほど感じられた。自分はいいたいのに、相手に伝えたいのに言葉できない、はがゆさ。

自分では分っているつもりで語っている言葉を追求されてゆくと中味が抜けていたりする。私はこういった場に参加するのは初めてで、最初、一言、一言追求されるのにとまどった。簡単に語っている言葉でも再度確認してみると、まるで分らなくなってしまう。それが、素



朴な言葉で一つ一つ発して行く中で、それを積み重ねてゆく内に次第に自分自身語っている言葉にも自信が出て、自分の言葉で語れるようになりはじめた。

私は今、京都を撮っている、はっきりここを撮らねばならぬという自分自身への決定もなしに、ただ今の京都を見つめるのには、南区のあの工場街を撮らねばならぬという、素朴なところで撮りに行った。ロケハンをし、自分なりに何かを感じてきたつもりでいた。けれどこの場でそれを自分達に分かりやすく説明してくれと言われた場合、単なる、おもしろおかしいエピソードは話せても、それは一体どう積み重ねられ、どう自分につながりがあるのかと考えると、何も言えなくなってしまう。ようするに感じたことを話してはいるが、自己完結的に終って、そこからどうなるんだっていわれると話しが進まないのである。

自分では受けとめきっているつもりでも、その感じてきたものが、積み上がらないのである。ようするに自分なりに感じてきているようで、そのものの中に入りこめていない自分を感じた。自分自身の中で受けとめる姿勢が、はっきりできていない故に、まるで向側とのぶちあたりができていなかったことを感じる。

レポート (7)

---

私の今までの歴史をふりかえってみる時、今、この中国という事、(具体的にはイメージとしてはないが)その事をやるというところにしか今私の存在ということはない。

今新たな思考方法の確立を計る。

それは具体より具体へという原則論にも近い事、その事へのまい進である。

今を突破する事、それは過去への沈潜ではなく、未来への志向である。

最近思うことは、今までみたいに、いつもやり得なかった部分のみをいつも問題にするのではなくて、やりえた部分を積極的に評価し、その事をして、行動のエネルギーとする。という所にしか今の広島の状態そのものを突破する力を私達は持ち得ないのではないか。

— これは普遍的なことではなく、今の広島の状態に於いての事である。 —

そして確実に、やる事、を一つ一つの物理的表現に化していくという作業をやることにむけて、今やる事をきめていくという志向性をも含むことにしか、何かをやることということとはできず、一つの行為を現実的に結実させることはできない。そして今、私達の中において、いろいろな怒りの蓄積をはからねばならぬ。怒りとは決定的なエネルギーである。



こちら側をくつがえす行為の中で、はじめてむこうをかえうる。

広島ならば広島で生きている人々が日常生活の中のうらみつらみを全て内に封じこめてしか生きてゆけないという状況の中では、自らも騒乱をもって広島、中国に向わなければ縦断もやりきれない。

決意のみ新たにおこされてきたが、それは今ある自分らから出発してきている場、位置をくつがえす行為がなかった。故に自らは常に安全な身の置き場所を確保していて、そこからしか出発し得なかった。

「広島では何か事を起そうとすれば必ず一人になる（尾崎）

九州と近接に結びつく下関、日本海に面し離農率、人口過疎最高の島根、砂丘と京都に近い鳥取、西日本の工業地帯の一大中心地となろうとしている岡山、山陽新幹線、中国縦貫道路……。

自己の行為の起点とすべきもの（思想性とか論理性）が今でもはっきりしないで写真を撮っていつも足りないものがあつた。

行為の起点をもちえないことはぼくにとって対象とはっきり対決出来る武器を把むことができないことだった。起点をどう構築するかを抜きにして今迄行動に走っていた。そして、その行動してきた中でもその行動の論理性とでもいうべきものを自己のものにしえなかった。

起点を構築することは僕がどう自己の生活を自らの手できり拓いていくかという問題にかかっている。安易なままに生活することは許されないし、そうする事は自分の生活を墮落させてしまうことだ。

起点をどう構築していくかが僕にとって一番の問題だ。それは現実総体に対してどうかかわりあいをもっていくかというところで、はっきりさせていかねばならない。起点抜きの短絡した過程をひとつひとつ埋めていく作業で行為を決定させていく。 レポート (9)

————— ○ ————— ○ ————— ○ —————

広大斗争に感じたすごさについて語られた時私は少々ドキリとしました。

子供をずっと撮り続けていた、かたくなな私を京都を撮ることに至らせた一つの契機、同大斗争、あのすごさを感じた。私はどこへいったか、確かにあの時点での私の同大斗争へのかかわり方は、事の派手さに目を奪われたあいまいなものであつた点は否めない。しかしそういっ



たことを越えて、もっと私の本能そのものにドシリと響いてきたあの〈大変だ〉といった感じ、それを感じ得た自分というものをもっと大切に見守って育ててゆくこと、ともかくあのすごさを感じた私を忘れてはならない。そして斗争に感じたすごさに対処しうるすごさ、パワーをめざして私達の“京都”は始まったのだ。

そのパワーをどれだけ発揮しうるかという辺で私達の集団が組まれねばならないのに、私達の集団は個を浄化させるための有効性の辺でしか存在しえていなかったようだ。

今あの〈西陣〉の写真撮る私の出口は、集団の中の私を考えることによって、本当の意味の自己の深化を図っていくことだろう。 レポート (10)

---

今までの話の中ではっきりしたことのひとつは、“京都”をやっていく場合の私達が本当に建設的な方向で京都に向かい得ていたかどうかということ。

西陣を語るときの私、過去の自分の写真を語る時の私。

そのダメな部分をダメそのものとして語ってしまい、そこからそれでは、そのダメな部分をどのように処理しダメでない部分にしていくのか。という私自身の積極的模索がないままに、〈これがダメなら今度はアレ〉といった安易な私をみるのである。

自己完結の円環運動を続けていく個々が集まることが、私達の集団撮影行動でないことは明きらかである。やれた部分、やれていない部分をそれぞれの段階ではっきり見切って行き、ひとつひとつの小さな話、一枚一枚のつたない写真を積み重ねてゆく、そこからしか“京都”はやれないものとしてある。 レポート (11)

---

生活することの何たるか、我々学生が実生活者と違うことはただ「飯をくう」という一点のみにすぎない。実生活者と我々をとりまく社会の様相が、彼らと我々の違うことでは決してない。しかしその一点が行為の次元からスライドする自己崩壊の危機をふくんでいる。もしくはその生活の重苦しいことを空洞化させてしまう。明治の近代人が近代の自我を日本の社会の中でたてようとした時、どうしてもぶつからざるを得なかった日本の生活風土の暗黒部分。彼らがそのことを真正面に見すえて生活にくいこんでくる国家権力と対峙しようとしないうで、権力にのめりこんでいく時、吸収されるしかなかったとき、日本の風土の中で、もくもくと生きぬ



いた一人の実生活人にもおとる。

我々が生活者に近づいてゆきつつある時、今自分が生活の論理をうちたてようとするとき、自分の軽さを感じる。四日市の人々の怒りといった所ではどうにもならない、その重ささえもうわつつらに流れる — その生活することの重苦しさを背負い、そこでの現実をのりこえる思想をたてたい。

現実にあることをやさしくみても、現実と均衡関係を結ぶことでしかないし、自分の中にある幼ない時から馴れ親しんだ生暖かいもので現実にやさしくいる人をみようとしたとき自分に火の粉がふりかかってこなければ、現実の重苦しさがわからない。

自分がみようとする、否定しようとする人間と同じ位置にいてしまう否定されるものの内に自分がいる。自分の中で自己完結的に生きることを拒否し実際に現実に対して有効な形のあることを現実に対して出しきることの中で生きることを始めたい。

サークルということが、他人ということが、自分に傷み、重荷としか感じなくなっていたことから、実際に人と話し合う中で相手を殺せる自分を持ち続けるようにしたい。

そういう風に常に自分を追いつめること — そのことをこれからの具体的な一つ一つの人間関係の中で構築してゆく。

レポート (12)

現在の状況の中でのサークルを自己の活動を如何にして展開していくかが、自分の内に問題となっている。個人があつてのサークルであることはわかるが、サークルとしての集団、組織性を各個人の主体性を抱括した形で展開させる事が今の問題だと思う。

動けば動くほど沈滞していく状況の中で自分をどこに向けていくのか、そして自分を含めた組織を動かしうる具体的問題提起を見つけだす必要を感じざるを得ない。

写真と自治活動を含めた上での運動体を作りだし、そして持続させていく為の原点をどこに置かねばならないかを捜し出さねばならないと思う。

レポート (13)



## — 広島 デ —

24年前、20数万の屍体と黒灰とに化したヒロシマ、そしてその上に産出された今日の広島。それはまさに24年間の戦後日本の高度成長の雛形である。毎年夏になると、8月になると欺瞞的に平和・ヒロシマ・原爆が唱えられる。「国家の最高の司祭でなければならぬ」とされ、華々しく行なわれる8月6日の原爆祈念平和式典の蔭に幾多の人々が虚妄な24年間を過して来たことであろうか。又、海岸の埋め立て地2千万坪の広大な敷地と1分間に1台の生産力を持つ東洋工業、紙屋町周辺に立ち並んだ近代的なビルの片隅にもう消えかかってしまいそうな原子爆弾の閃光で人影の焼けついた大理石の柱。幾何学的に整美され、芝生とハトと噴水に飾られた平和公園。住宅計画と銘打った市政で外見だけは清掃し、市営アパートが林立して行く福島町の未解放部落。住民の中でも立退同盟と立退反対同盟の2派に対立し、又真中を太い道路が通り2分されつつある相生町の原爆スラム。体のいい国家の保護という名の元に入院出来た事だけで感謝しきっている原爆病院の被爆者。今、広島の一つ一つの動きはあの原罪をカモフラージュし、虚飾と虚妄に色どられる広島を作り上げようとしている。我々はこのような広島に1年半7回にわたる撮影行動で挑みかかった。そして8.17、18の広島闘争をあの何事も起こりそうもなく、坦然と続く広島の日常的な時間帯を断ち切り、それを変質さすべく方向へと向かうものである事を措定し、その折の写真と7次までの写真とでレイアウトを行ない、ニコンサロンで写真展を行なった。そこには我々がとらえた様なhiroshimaが展開する。それは1次から7次まで我々が追求し続けたhiroshimaの総体である。我々は1968年8月の第1次撮影以来7次まで、1回毎に組織的に検討を加え、1回毎に脱皮するように変質して来た。4次までを覆う黒さ——それは1個の人間として何をなすべきなのか、を自分自身に問い続ける思いの中から対象へとぶつける起爆力でもあった。それは1個の人間の内部での葛藤から生じるパワーでもあった。それが見る者にとって自己を見つめ返さずにはいないものであった。しかし、それが黒い魂のようなもので人の心に投げられられたとしても我々が設定したhiroshima——それは現実の中で様々に押し隠されてはいるが人間の本質に鋭く突きささり今まだ日の目を見ないが、脈絡と日本に、そして広島に顕在化している実体としてのhiroshima——にはなって行かない。それから我々の心と思考は広島をさまよう。hiroshimaを切りとれるものは何か？ 何にどうして向かえばhiro-



shima に至ることが出来るか？ そして個人の枠を越え、思いだけに留まらず実体としての hiroushima に向いうるには？ この様なプロセスの中から、我々の行為の累積としてこのレイアウトが完成した。これは個人的枠から対象としての hiroushima を露呈するものとしてある。ここに展開する hiroushima は我々に具体的に問題を突きつけて来る。それは我々の日常生活の中でふと見過してしまいう些細なこと（しかし、それが我々の日常にいかに影響し、1人の人間を変えて行ってしまうことか）までも見極め、我々に諸々の問題を提示してくれる。それらは複雑にからみあい鋭く我々に迫ってくる。そして本質へと杭を打ち込み、写真としての完成度は高い。

我々はこれらの写真群を見る中で何を感じ、何を考え、何を志向しようとしたか？

この写真群は我々の心の中に何を残して行ったか？

我々は横断歩道を渡って来る群集をとらえた写真を見る事によってその群集の1団の中に見え隠れして歩いている自分を見出す。そして、ぞっと寒気が背筋を通る。そして、色々な問題が課せられて来る。我々は写真群の一枚のその写真を見る中で自分に課せられた問題を写真が展開すると共に遂行しなければならない。ぞっと寒気を感じたその事は1人の人間にとって大きな事だ。それを我々は写真を見る中で具体化し、未来へとつながる1つのビジョンへと移行しなければならない。我々がその写真を見る中で感じたことは、そこにそうもいる自分自身を突きつけられただけであった。この写真群が我々に残したものは諸々に現象化している事柄を提示はするが、それが終結のない、結実のない終りであった。我々が1年半広島とかかわり続けて来たことは写真を完成させる事だけではなく、ただ対象を見極める事でなく、その対象とぶつかり合う中でみずからの行為を起こす事であった。我々はこう無限に奇形化して来る現実に対し、一瞬の内に自己の存在を霧散してしまいう現実に対し、集束し顕在化させた hiroushima をたたきつけ、見る1人1人に確実なる1つ（それはあくまで個別を抽出しそれを問題にし、具現化した1つのもの）を確固たる傷跡として残るよう、そしてその傷は生涯癒えぬものとなり、人間の正当なる生きる権利を主張すべく闘いを開拓せねばならない。

今、我々は写真の可能性へと、そしてこの写真群から更に一步足を踏み出さなければならぬだろう。それは又新たな第8次の集団撮影行動を貫徹する事を意味する。

そして一冊の写真集〈ヒロシマ・広島・hiroushima〉として出版し、より多くの人に手渡し、手にとって見せる事によって1つの写真を行なう行為が結実するのである。



## —\*— 提 起 —\*—

1 1.1 7 以来、目に見えて厚い権力のカベを前にして、一つの運動は、それを切り開くべく視点を持ち得ないままに混迷していく。

ありとあらゆる既成秩序、道德価値が今まさに崩壊し、あらゆるものが混沌としている暗い権力状況と精神状況との複雑に交錯する中で、我々は激変する70年代に向かって、その混沌として、しかも目まぐるしく激変していく現実状況の渦中で、厚い権力的な社会のしくみに対し、一人の人間の思いを具体的な行為を苛酷な現実をつらぬき通し、どこを、どうしたらそのことを確かなものとして起しうるか。

今、巧みな権力によって、様々に人間が人間として生きることをすりかえられ、そこに安楽の位置を見い出していくといったことに対して、またそれに様々に関係する人間の一人一人が人間として自立し、自らを理論化し、意識化し、組織者になるといった新しい運動形態としての実践的活動の一步であるキャンペーン合宿を設定した。

この合宿において我々は足尾で、鹿島で、郡上で101広島デーによって提起されたことの中で様々にかつ、強権的に明治以来100余年という日本の歴史的過程の中で暴力的に再編成されようとしていく中で、何を見、何を具体化しえたのであろうか。

我々は日常的情况との対峙の中で人間の側からの叫びが、圧殺され、ある一定の律動をもって作り上げられていく社会のしくみに凄じい現実の姿を根元的なふるえをもって予感することで、その予感を意識化し具体化しようとする過程において、明治以来100余年という歴史的状況の中で、巧みに権力によってやられ、収奪されて来た人間達が親子三代にわたって営々と引きづって来たことの中において、それらのことを日本という歴史的過程の中で個と組織といった関係の中から、新たなる、組織運動体としての行為をとらえ直そうとする、新たなる視点を持ってここに101年研究会が提起される。

この中で我々は、明治以来100余年の歴史的過程の中で社会が個人が暴力的に再編成されようとしていく現状況に対して、ラジカルな危機意識を持つことによって確実に行為を起こしていかなければならない。

更にまた我々が現実に向って着実にある確かなる行為を起こそうとするとき、



テレビ、新聞等のマスコミを通してありとあらゆる形で、我々一人一人に重くのしかかってくる力は刻一刻、巨大な物量と共に我々を侵蝕していく。

このように日本の歴史的過程の中で、さまざまな形で再編強化されようとしている中で、我々が郡上で、足尾で、大阪で、その他ありとあらゆるサークルの集団撮影行動の深化の過程で、我々の感性と意識の集積の中から積みあげられてきた、我々にとって確かなるものを現実の側にむかってつき出して行かなければならない。

ここにおいて我々が今持ち得る有機的制度としての出版基金制度を提起する。

そしてそれは、個々別々に見れば極めて弱少の現実的基盤しか持ち得ぬ大学のサークルの域を全国的集合体として、自らの力で突破し、現実化可能なものへとつくりかえる営為であり、その選択は、「敗ける時もあり、勝つ時もある。しかし執ように壊し続ける」という思想性にのっとり、この歴史性を背に収奪しつくそうとする現実にもかって、その自らの歴史性をはらみ少しでもそれをつき崩す営為をになおうとする全てのサークルに対して適用される。そしてこの出版基金制度は、片方に現実的経済的基盤を与えるとともに、全国津々浦々の人間の営為を現実化可能なものへとつくりかえるための更に強固な組織性——現実的組織を創出しなければならない。というサークル、個人に対する逆規制をも持ち得るものとして、ここに提起される。

全国のサークル、個人は、この有機的制度を即刻現実化させる為の具体的検討に向かわなければならない。

\* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## 編 集 後 記

\* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

この総括書を再編するにあたって、私達が最も考慮したのは、これを「総括書」として終結させないこと。でした。それは、今度の69年度キャンペーン合宿が、その設定からして『私達が今、真に状況と噛み合った運動体としての性格を鮮鋭に持つためには』といった問いかけを自分達に課したことからも伺えるように、1965年以来「写真は、それを撮る者が現実に対する問題意識を持たない限り写真は生まれない。」「最終決定権は個人に」という、その最小単位を、その状況に生きる一人の人間に置き、その人間の生き方（一人の人間の中で意識されている事を



深化すると共に、無意識の中にたたみ込まれている事を意識する次元へとひきずり出し、拮抗させる中で、「一人の人間は、それを意識するとしなにかかわらず社会的存在であること」への意味を私達一人一人の中に問いかけること)を、この世への意識的存在者として問いかけ、深化させることにより、私達の“写真を撮る”という極めて感性的な行為を、意識的、実在的行為へと高めることを、営々と問い続けてきた。そしてその問いかけは、集団撮影行動の提示に伴い、一人の人間の内的な問いかけが類々と存在する幾多の個への連鎖を志向した時、私達は一つの運動体としてその敵が何であるかを問うことを要求された。そして今、その敵とは直接的な親でもなければ、直接的な国家機構でも無く、私達の幻想の中に営々と生き続けているものであることを知った時、1965年以来問い続けてきた＝個の自立とは何か＝サークルの自立とは＝集団とは＝という問いをふたたび、集団撮影行動＝北は北海道から南は沖縄まで更に世界へととの拡がりの中で＝という志向性を持つ運動体としての中から更に厳密に、ラジカルに問いはじめなくてはならない。この総括書は、そういった根源的層の中から思考する者にとってのみ有効なのであり、そのように、どこから読みはじめても、どこをとりあげて問題にしても構わない構成にしてあります。そしてこれを読む個人、これを使おうとするサークル体に対して、この根源的文化運動体としての全日本学生写真連盟への意識的加担者となり得ることを要請するものです。



編集 全日キャンペーン委員会  
発行 全日本学生写真連盟  
東京都杉並区成田東

1970年1月発行

定価 250円